

令和7年1月8日

長与町議会 議長 安藤 克彦

## 研修報告書

長与町議会議員研修要綱第7条第2項の規定により、次のとおり公表します。

### 1. 研修名（主催者） 町村議会広報研修会（全国町村議会議長会）

#### ○講演① 「読まれる議会広報紙の作り方」

講師 （一社）日本経営協会講師 中本 正樹 氏

#### 講演② 「パッと伝わる広報紙に！ やってはいけないデザイン講座」

講師 グラフィックデザイナー・（公社）日本広報協会広報アドバイザー  
平本 久美子 氏

#### 講演③ 「読まれない議会だよりに出す意味なし」 聴く・動く寄居町議会の挑戦

講師 埼玉県寄居町議会 議会広報広聴特別委員会委員長 鈴木 詠子 氏

### 2. 研修日時 令和6年9月25日（水）13時00分～16時40分

### 3. 研修場所 ニッショーホール（東京都港区）

### 4. 研修目的 議員の資質向上及び議会の活性化に資するため

### 5. 所 見 （記載は議席番号順）

#### 【下町 純子 議員】

##### ① 読まれる議会広報紙の作り方

講師の中本氏は自治体の職員として長期にわたり広報の仕事に携わってこられた方です。住民に分かりやすい広報紙を作るには、町を知る→発信する（記事にする）→住民に喜ばれる→もっと知りたいと思われる、という町を活性化する仕組みが重要。自分の町に真剣に向き合ってくれる人を増やしていき、住民全てが広報に関わっているという意識が大切とのことでした。町にどんな人がいて、どんなことをしているのか、町の課題や住民に刺さる記事など幅広く取材し、情報を伝えられる広報紙を目指すことが重要です。

講演の中で隣同士2・3人のグループに分かれて講師が出す議題を2分程度で話し合う場を設けて意見交換をしましたが、短時間でもそれぞれの主張を聞くことができました。この方法は11月の議員報告会でも生かせると感じました。進行役を決めての少人数での話し合いは自分の意見を発言しやすく、違った意見も聞ける良い方法だと思いました。

自治体の広報紙としての役割は前述したことが重要であると思いますが、議会だよりとしての範疇を越えているところもあると感じました。町の情報や特集記事は自治体の広報紙の役目であり、議会だよりは議員の一般質問の内容を中心に、特集を組むとしても議員報告会やアンケートに答えていただいた住民の声などだと思います。あまりにもいろいろな記事を掲載すると自治体の広報紙との境界が分からなくなりそうです。もちろん今までの議会だよりをよりよくするための努力は必要です。手に取ってもらえる議会だよりにするためにどう編集していけばいいのか議会広報広聴常任委員会に持ち帰り意見を出し合っって少しずつ変えていきたいと思っています。

## ② やってはいけないデザイン講座

講師の平本氏はプロのデザイナーで、現在奈良県生駒市在住です。

広報紙やチラシには目を引くデザインの仕方があるそうです。まずターゲットを決めること。つまり、主役を大きく作ると狙った層に気付いてもらえます。その上で、目に留まるレイアウトを決め、タイトル、キャッチコピー、イメージ画像を決めるという流れです。字の大きさや人の視線の流れ、余白や整列に気を付けることが大切です。

生駒市は平本先生をアドバイザーにして広報紙を制作しているのでかなり質の高いデザインとなっています。本町ではそれはできないので、講演で知ったデザインの方法を議会だよりに反映していこうと思います。

## ③ 読まれない議会だよりに出す意味なし！

寄居町は広報紙コンテストで1位常連の自治体です。しかし初めからそうではありませんでした。第1号はひな壇に年配の男性議員ばかりがずらりと並びかなり衝撃的な写真でした。女性議員は見当たらず古式ゆかしい表紙でした。それが今では住民が表紙を飾るようになっています。まずは手に取ってもらえる広報紙を、ということで住民の声の取材（名前、写真、コメント掲載の許可）やQRコードの活用による関連ホームページへのリンクや資料映像の作成にも力を入れています。年間の議会の流れと政策サイクルを分かりやすく住民に伝えることも心掛けています。

寄居町では議会広報広聴特別委員会に属す議員だけでなく毎回全員の議員が住民に取材し記事を書いているそうです。これは編集に関わる作業を、①議員による取材（原稿、写真含む）、②議会事務局による連絡、確認、調整、③委託業者による編集全般、④議会広報広聴委員会による企画、レイアウト作成、校正という分業のシステムのおかげです。こちらも言わばプロの手を借りているわけですが、素人集団が編集に膨大な時間を費やしても住民が満足できるものは作れない、それならプロの手を借りて自分たちは住民の声を記事にすることに徹する活動に重きをおこうと割り切っています。

特集記事も毎号住民と一緒に考える媒体であることを意識して組んでいるそうです。特集だけでなくすべての記事に対して、見出しで記事の内容がわかるようにする、表紙は記事の内容に即したものにす、一般質問の議員写真は動きのあるものを使用するなど、細部にわたり配慮しているそうです。こうして試行錯誤の末に今の議会だよりになっています。生駒市も寄居町もプロの手を借りていること、記事の内容（写真含む）が自治体の広報紙と重複することがないのか、議会だよりの範囲はどこまでのものなのか、私個人としては少々疑問に思うこともありますが、住民に伝えよう、住民の意見を聞こうという姿勢は見習うべきだと思いました。住民の写真がとても多いことに驚きました。これだけの住民が顔出しオーケーなのは議員や自

治体と距離が近いのだらうと思いました。

最後に

なかなか住民の方にじっくり見てもらえない本町の議会だよりですが、議員の一般質問を1ページ使って掲載しているところはいいところだと思います。一般質問に関しては記事も本人が書き、写真やイラストも自分で探してきます。寄居町は議員の一般質問は1ページに3・4人で要約したものでした。

定例会の議案および議決結果については議案の内容を簡単に説明する文章を掲載すると住民の関心が議会に向ききっかけになるのではないかと思います。賛否が分かれた議案についてもその内容を補足すれば議員個人の考え方もわかり議員を身近に感じてもらえるのではないのでしょうか。

各委員会の視察報告や住民懇談会などもタイトルに即した写真を選び、何を話し合ったのか分かるようにしていきたいです。

改善する点はありますが、まずは写真と記事のレイアウトを考えて手に取ってもらえる議会だよりを目指していきたいと思います。

#### 【堀 真 議員】

主な研修の中身としては、広報委員に必要な議会だよりのデザインスキルやレイアウトの編集技術、先進事例の寄居町議会の議会広報を学ぶものでした。

個人的に感銘を受けたところは、寄居町議会の話になりますが、議会広報だからと議会用語を使うのではなく、読む町民に伝わるよう簡単な表現で議会だよりを編集しているところです。

それから、本町の議会だよりは一般質問のページを多くとっていますが、寄居町は一人1つの質問を掲載しており、ページとして最小限にとどめています。基本的に議員の一般質問は各議員が個人で発信するといった形をとっており、あくまで議会としての内容をピックアップするという優先順位も非常に参考になりました。本町も議会改革を進めておりますが、広報としても、もっと手に取って読んでもらえるよう、また議会に興味をもってもらえるような内容づくりを目指していくと決めました。

#### 【藤田 明美 議員】

3人の講師の方がそれぞれのテーマに沿ってお話されました。

##### ①読まれる議会広報紙の作り方：(一社)日本経営協会講師 中本 正樹氏

今後の広報紙作りに役立つ資料をもとにお話くださいました。

「みなさんの議会広報紙は読んだ人にどうなってもらいたいですか？」と問われ、そんなこと考えもせずに担当ページを作っていたことにハッとさせられました。広報紙は町民とのコミュニケーションだということも教えていただきました。

私は長与町議会広報紙を読んだ町民の方が、自分が住んでいる長与町に誇りを持ってもらい、長与町のことを思わず誰かに伝えたいくなるような広報紙を作りたいと思いました。そのためには読んでもらえる広報紙でなければなりません。現在の長与町議会広報紙にも直ぐに生かせることもありましたので実践していきたいです。

##### ②パッと伝わる広報紙に！やってはいけないデザイン講座：グラフィックデザイナー、(公社)日本広報協会広報アドバイザー 平本 久美子氏

具体的なデザイン方について学びました。

私は自営の仕事柄、自分でチラシを作ったりしていることから今回お話いただいた内容は以前勉強したことでもあったのですが、それを長与町議会広報紙にも生かしていないことに気がきました。長与町議会広報紙に今後生かせていけたらいいなと感じました。

③「読まれない議会だよりに出す意味なし」聴く・動く寄居町議会の挑戦：埼玉県寄居町議会  
議会広報広聴特別委員会委員長 鈴木 詠子氏

寄居町には議会だよりの編集方針があり、平成31年よりそれに沿って作成しているそうです。

本来の議員の仕事は「聴くチカラ」であるとお話されました。町民の方の生の声を聴き、町政に役立てる仕組みがここにあると思いました。

広報委員である議員が町民の方へ取材したり写真撮影を行っていて大変忙しそうでしたが、やりがいがあるだろうと感じ講演を拝聴しながらワクワクしました。

一方、寄居町には広報紙にかける潤沢な予算があり、議会事務局と委託業者と連携しながら編集を進めているとのことでした。それで広報全国コンクールにて最優秀賞を毎年のように受賞できるのかと思いましたが、だからこそ読まれる議会広報紙作りができ、より良い町づくりに貢献しているのだろうと感じました。

長与町で町民の方々の幸福度を上げることに貢献できる議会広報紙を作りたいとも考えました。

#### 【岡田 義晴 議員】

本研修会は3部構成となっており、第1部は「読まれる議会広報紙の作り方」と題して（一社）日本経営協会講師、元小美玉市行政職員の中本正樹氏による講演。さすがに元行政職員らしい、行政職員としてのさまざまな角度からの切り口で、読まれる議会広報紙のあり方などを多くの事例をもとにご説明いただいた。特に関心を持って注目した点は、広報おみたまの編集方針であり、広報がまちを活性化する仕組みとして「発信する」→「喜ばれる」→「もっと知りたい」→「まちを知る」のサイクルを作り上げている。その他にも、本町の議会広報紙（誌）作りにも大いに参考になる取り組みが紹介された。

第2部では「パッと伝わる広報紙に！やってはいけないデザイン講座」と題してグラフィックデザイナー、（公社）日本広報協会広報アドバイザーの平本久美子氏による講演。講師がグラフィックデザイナーとあって、イベントポスターやチラシなどの数多くの例をもとに、目にとめてもらう工夫、気づいてもらえる工夫などをご紹介いただいた。説明の中に「ジャンプ率」という言葉があり、タイトル、見出し、文章の文字サイズをそれぞれ2倍、3倍にして、遠くから見ても読みやすい工夫として紹介された。これも本町議会広報紙作りに大いに参考になるものと実感した。

第3部では「読まれない議会だよりに出す意味なし」聴く・動く寄居町議会の挑戦と題して埼玉県寄居町議会、議会広報広聴特別委員会委員長の鈴木詠子氏による講演。寄居町議会だよりは令和5年度の広報コンクール全国1位に輝く実績どおり、その編集方針は、基本姿勢、町民参加、政策サイクル、優先順位、言葉・写真で伝えるなどあらゆる点において用意周到であり、さすがの構成力の高さを感じた。本町議会だよりは、まだまだそれには及ばないが、参考になる点は多々あったので、今後の本町議会広報紙作りに大いに生かし、町民のためのより良

い議会だよりを目指していきたい。

【八木 亮三 議員】

一人目の講師は元茨城県小美玉市職員で、地域ブランディングの視点からの広報紙作成に携わってきた中本正樹氏で、読まれる広報紙づくりのポイントの解説でした。

内容としては、具体的なレイアウトなどの技術的なことよりは「読む人の視点に立つ」という意識・姿勢についてが中心で、「自治体広報紙」には当てはまっても「議会だより」では難しいと感じる部分もありましたが「住民の声への『答え』となる企画」「常に新しい取り組み・見直し」の必要性などは、本町議会だよりに足りていないものとして、今後検討が必要であると感じました。読む人の興味を引く手段としては「議会だよりなのに、〇〇」という「ずらし」が効果的だという話についても、とかく「議会がやることではない」という意見が出がちである地方議会の活動の中で、その固定観念を取り払う柔軟さは確かに大切であると思います。

また、技術的な話しとしては「中身と表紙を連動させる」というものがあり、こちらについても、これまでの本町議会だよりの表紙写真は見た目の華やかさや写真としてのクオリティを追及しがちで、結果的に花や自然、公園など当たり障りのないものが多くなっていましたが、例えば土地区画整理事業の現場や新図書館建設予定地など、華やかさはなくとも、審査した議案に関連するもので、かつ住民の関心を惹きそうなものにする事で「議会」らしい硬派な表紙を目指すのも一つではないかと、目から鱗でした。

中本氏の講演は、途中にたびたび隣の受講者とお互いの考えを話し合う時間を取ることでお互い新たな発見をしたり自分の考えをまとめたりしながら次に進んでいけるのが特徴的で、その際に片方の人間が最初に話を振る役割に徹するという方式に、広報ではなく広聴の方になりますが、今後の議会報告会での司会、特に「ワールドカフェ方式」などで町民とグループを作った際などに、話すきっかけを与えて円滑に進めるヒントを得られたと思います。

二人目の講師の平本久美子氏は（公社）日本広報協会の広報アドバイザーでもあるグラフィックデザイナーで、基本的なデザイン・レイアウトについての解説でした。

デザインを考える前にターゲットを決めることや、紙面に目をひく「主役」「キャッチコピー」を作ること、読者の視線を誘導する「ジャンプ率」など、デザイナーにとっては恐らく初歩的なことと思われることも、これまで意識してこなかったことばかりで、こちらは大変勉強になりました。最新の長与町議会だより用に自分が作った原稿が「やってはいけない」ことばかりの内容だったことが分かり、研修から帰ってきた当日に研修で教わったとおりに作り直しました。

最後は、議会だよりのコンクールで何度も受賞をしている埼玉県寄居町の議会広報広聴特別委員会の鈴木氏が講師で、町議会だよりに特化した解説でした。本町議会だよりでもよく掲載している、視察報告に添付する視察を聞いている議員の様子を「証拠写真」のようなものなので一切掲載しないという話は確かにそのとおりで、毎回そうしているから、と何も考えずに続けてきたことを反省しました。今後、できれば変更したいと思います。また、同時期に発行される町の広報紙に掲載されているという理由で、予算決算などのグラフを一切載せないというのも、限られた紙面の有効活用にもなる大胆な方針だと思いました。

そのように、非常に納得できる話もある一方、「町民の声を載せ続けてきた」という話やQRコードから動画を見てもらうという話については、それがまさに「目的」になっているような、

本当にそれをやる効果・意味があるのか不明に思う部分もありました。市民の声は、幅広く偏りなく拾えば自治体にとっても議会にとっても参考になるものも出てくるとは思います。行政や議会に不満を感じている一部の人の表面的な思い込みや勘違いなどをそのまま載せることになる懸念は拭えません。また、動画についても、議案の内容などを分かりやすく解説するような、市民にとって必要なものであればいいと思いますが、紹介された事例は、紙面に登場した高校生のボクシングをする姿や議員が抱負を述べるようなものなどで、必要性が乏しいと思われました。

しかし、それを含め、長与町議会では何を取り入れ何を取り入れないでいくか、それらを今後協議するきっかけには大いになったと思います。

今回の研修の冒頭、一人目の講師である中本氏が受講者に「何を目的に作っていますか？」と投げかけたのに対して、私は「市民に議会への関心を持ってもらい、議員が『必要な存在』であると理解していただき、議会だよりで知った町の動きについて周囲の人と会話して、最終的には投票行動に結びつくこと」ということが頭に浮かびました。今後も、その目的を少しでも達成できるよう、よりよい議会だより作りに今回の研修を反映していきます。

#### 【松林 敏 議員】

研修は3部構成で行われました。

1部目は読まれる議会広報紙の作り方というテーマでの研修でしたが、広報紙全般の話として、広報紙の目標を次の4段階に分けて説明がありました。

- ・認知される
- ・関心が湧く
- ・心が動く
- ・伝えたくなる

議会だよりは当然認知されないことには読んでもらえないものですが、市民に対して認知されるような工夫をもっと考えなくては行けないと感じました。関心が湧くは次の心が動くにつながると思いますが、刺さる広報は自分ごとにさせ、心を動かし、読者に考えさせることができ、その先には読者が人に伝えたくなるものであるという話でした。紙面のレイアウトや写真の効果的な使い方などもありました。

2部目は「パッと伝わる広報紙に！やってはいけないデザイン講座」というテーマで広報アドバイザーであるグラフィックデザイナーの方が講師となって、レイアウトやデザインのルールのお話を聞かせていただきました。デザインのルールというところで、文字の大きさを何種類か使い分けることと、フォントもいくつか使い分けることと、余白を使って記事の整列を行うことという3つのルールが特に興味深い話でした。

3部目は議会だよりのコンクールで全国的に有名な埼玉県寄居町の広報広聴特別委員会の委員長が講師となって、編集方針「読まれない議会だよりに出す意味なし！」での寄居町の議会だよりの考え方や、取材、具体的な紙面づくりなどかなり丁寧に説明を頂きました。寄居町の議会だよりの特徴として、市民を写真入りで何人も登場させている点と、特集に大きくページを使っている点の2点が印象に残りました。

本町の議会だよりは、先輩議員方が工夫を凝らしながらブラッシュアップされていて、見やすいフォーマットで記事も書きやすいと思います。しかしながら、デザインやレイアウトはも

ちろん、記事の取舍選択や、特集記事の掲載など、より多くの町民に読んでもらうよう変化を恐れず柔軟に進化していければいいと感じました。

#### 【浦川 圭一 議員】

・読まれる議会広報紙の作り方 元小美玉市行政職員 中本正樹 氏

題目は議会広報誌の作り方ということであったが、講師自身が本年3月まで行政職員として、行政の広報紙の作成等に従事されていたとのことで、行政の広報紙を参考に説明を行われていたが、行政職員が専任で対応するものと、私ども議員が短期間で記事をまとめて発行する議会広報誌とは伝えるべき内容なども違うのであまり参考にはならなかった。

議会事務局の職員を充実させてその職務の多くを担ってもらうなど考えれば、研修で示された作り方に近いものができるのでは、とも思ったが、そこまでやる必要はないと思った。

・パッと伝わる議会広報誌に！やっではいけないデザイン講座

グラフィックデザイナー 平本久美子 氏

デザインの専門的な知識をもとに、紙面の配色とか、文字の大きさ、レイアウトの考え方など、見やすく読みやすくなるような工夫を分かりやすく説明していただいた、デザインを比較しての説明は大変分かりやすかった。

説明が多岐にわたり、一度聞いただけでは到底覚えられるものではないとも思った、講師自身が編集に関わっているという、生駒市議会の広報誌をもとに説明をされていたが、専門家に依頼すればより良いものができる、ということも思った。

・「読まれない議会だよりに出す意味なし」聴く・動く寄居町議会の挑戦

埼玉県寄居町議会 議会広報広聴特別委員会委員長 鈴木詠子 氏

町村議会広報誌全国コンクールの1位を目指して広報紙づくりに取り組んでいるとのことで、議員が町内取材に出向き記事の原稿、写真などを準備するとのことで、議員さん達が大変頑張っておられると感じました、編集については、議員、議会事務局、委託業者、と連携しているとのことで、ここでもやはりプロの方が関わっているのかと思った。

研修を聞いて思ったことは、広報紙を作る場合に、議会事務局の広報紙担当職員を強化する、また専門家の力を借りて一部業務を委託するなど、お金をかけて取り組めば、より良い広報紙の発行はできると思ったが、それを町民が望むのか、現状の議会だよりの内容で十分と思ってもらえているのか、議員はよく考えるべきだと思った。

#### 【安部 都 議員】

今回の広報研修会は、3分野の3人の方からの異なった視点を交え、それぞれのご講演をお聞きしました。目的には、広報紙の作り方・やっではいけないデザインや読まれる議会広報紙にするためのアドバイスや広報紙完成までの過程をご教授いただき、大変ためになる内容でありました。

最初の「読まれる議会広報紙の作り方」では、講師の一方的話を聴くだけでなく、会場の参加者も巻き込んでの会場参加型のご講演でした。お題ごとに、グループに分かれ、2分タイムで各自で考え、各自の意見を発表しあえる講演は、飽きさせないあっと驚く手法に感嘆し、「参加している感」がすばらしかったです。安部が司会の担当になり、2人の議員に質問する形となりました。①まずは「読んだ人にどうなってもらいたいのか?」「読んでもらえる広報紙は?」

の問いに本町の議員から出た感想は「町の問題を自分のことのように知ってほしい」「議会だよりも目を通してもらい、町の政治に関心を持ち、共にまちづくりに参画してほしい」「このままの体制では、編集時間が足りない」などの感想と意見が出ました。また、②広報ってどんなことをするの？③読んだ人の声、特集を載せていますか？④心が動く！広報紙になっていますか？⑤若い人が関心を持つ記事になっていますか？など講師の方からの問題提起やアドバイスがありました。本町の議会だよりも長年マンネリ化しているところも否めないで、町民の心が動く、共感を持てる、取材インタビューを実施し、特集記事を掲載していくなどの改革も今後は必要だと考えます。最後に、広報紙の先駆者である寄居町議会の鈴木氏が発言した言葉に「議長から日本一になる広報紙を！」と激励され、「それから心に決心し奮闘した」と胸中を明かされました。感動とやる気が大事だと思います。本町の議会だよりも「手にとって読みたい！議会広報紙」となるよう少しでも近付けるよう精進していきたいと思いました。